

カッパドキアの聖堂装飾における「聖母の眠り」図像再考

——聖堂内配置と周辺の聖母伝図像に着目して——

武 田 一 文

A Reconsideration of the Images of the Dormition of the Virgin in Cappadocia:
On its Placement and Connection with the Images of the Life of the Virgin

Kazufumi TAKEDA

Abstract

The Eastern Church maintains doctrinal differences with the Western Church, including the celebration of the death of the Virgin Mary. While the Western Church commemorates the “Assumption,” the Eastern Church commemorates the “Dormition of the Virgin”; the Dormition is one of the twelve great feasts in the Orthodox Church, and its paintings became the main subject of the murals decorating the churches. Through the iconography of the Dormition of the Virgin, this paper examines the evolution of the church decoration program in Cappadocia, a region where Middle Byzantine art remained coherent and was later cut off from the center of the empire.

In Many Orthodox churches, the “Dormition of the Virgin” is placed above the doorway of the west wall; however, this placement appears after the twelfth century, and it is not easy to determine what it looked like before. Not many mid-Byzantine churches have survived, and Byzantine art history saw a period of rupture known as Iconoclasm between the eighth and ninth centuries. An exception to this is Cappadocia the periphery of the empire.

Fifteen examples of Cappadocia’s Dormition have been collected by the author through fieldwork along with photographs. As H. Maguire has pointed out in his *Art and Eloquence in Byzantium*, the placement of the Dormition is often associated with the Nativity in the churches of Cappadocia; however, it is not clear whether this connection is only morphological or whether it reflects theological thought.

The decoration program of the Byzantine church sometimes functions as a visual manifestation of theological thought. I would like to point out Kepez Kilise as a possible example, suggesting that the placement of the Dormition on the sub-apsis conch and the connection with the presentation of the Virgin and the Nativity may have been intended as an exaltation of the Virgin herself. In the following study I will investigate the specific theological references that connect these three images.

正教会はカトリック教会と教義的に今も少なくない相違を抱えるが、聖母マリアの死にまつわる祝祭もその一つである。両教会とも8月15日を祝祭日とするが、西方教会がマリアの肉体が天に昇った「聖母被昇天」を記念するのに対し、東方教会はマリアの死（眠り）と魂が天へ昇った「聖母の眠り（生神女御就寝）」を記念する⁽¹⁾。この「眠り」は正教会において重要な「十二大祭」に数えられ、その図像は聖堂を飾る壁画の主要な主題となった⁽²⁾。本論は「聖母の眠り」図像を通し、カッパドキアという中期ビザンティン美術がまとま

(1) 主に「肉体」が天に昇ったか否かが焦点となる。ただしカトリックにおいても正式に教義として認められたのは1950年のことである。また正教では肉体の被昇天を認めないものの、ポスト・ビザンティン期（15世紀半ば～）の図像には西欧の影響を受けてしばしば「眠り」図に挿入する形で被昇天の様が描かれる。

て残り、かつその後中央と断絶した地域における聖堂装飾プログラムの変遷を考察するものである。

「聖母の眠り」図像は多くの聖堂で西壁扉口上部を定位置とする。しかしこれはおおよそ12世紀以降に見られるものであり、それ以前の様相を伺うことは容易でない。中期ビザンティン期(9~13世紀半ば)の聖堂は現存数が多くなく、さらに遡ると8~9世紀には^{イコノクラスム}聖像破壊運動というビザンティン美術史上の断絶期が横たわる。しかし、その例外と言えるのがカッパドキアである。「眠り」図の現存作で最も古い時代に当たる7~9世紀の壁画をはじめ、複数の図像が比較的狭い範囲に残されている。歴史的には、首都コンスタンティノポリスを「中央」とし、帝国第二の都市であったテサロニキの在るギリシア、バルカン半島南部を中央に近い領域とするなら、東地中海の島嶼部やカッパドキア(トルコ)は周縁、辺境に位置付けられる。とはいえカッパドキアは11世紀中頃まで軍事上重要なテーマが設置され、また修道文化も栄えた土地であった。しかし1071年のマラズギルト(マンツィケルト)の戦いでビザンティンの親征軍がセルジューク軍に大敗したことにより、カッパドキアを含めたアナトリア(小アジア)からビザンティン勢力は一掃された。そのため中央からの情報流入は遮断ないし著しく滞ったと考えられ、古い様式、古いプログラムが残りやすい環境であった。一方でカッパドキア研究の現状として、岩石砂漠に未確認の小聖堂が多数残り、研究者の言及は大型、または優作と言われる壁画を持つ聖堂に限られている。図像も図版として入手できるものは未だ少ない。本論が対象とする「眠り」図像も、写真が出版物で提供されたものは五指に満たない。そのような状況下、カッパドキアの「聖母の眠り」を体系的に考察する先行研究も不足していると言わざるを得ない。筆者はカッパドキアにおいて三度のフィールドワークを実施し、これまで十五の聖堂で図像を確認し、写真撮影を行った。本論ではまずフィールドワークで得られた作例を周辺の主題と共に成立年代順に確認し、次にカッパドキアにおける「聖母の眠り」の特質を考えたい。

カッパドキアの作例概観

アーチャルトウ・キリセシ Ağaçalı Kilisesi in İhlara⁽³⁾ (fig. 1)

ウフララ地区、アーチャルトウ・キリセシは、カッパドキアの「聖母の眠り」の中でも最古のものと考えられる。北翼廊のヴォールト天井に「眠り」は描かれる。作例は剥落が激しく、成立年代には議論があるが、7世紀から9世紀のものと考えられる⁽⁴⁾。特筆すべきはその構図であり、マリアの魂を持ったキリストが異時同図的に2体描かれる。キリストが同一図内に描かれる例はソポチャニ修道院(セルビア、13世紀)など類例が認められるが、それらが表すのはマリアの

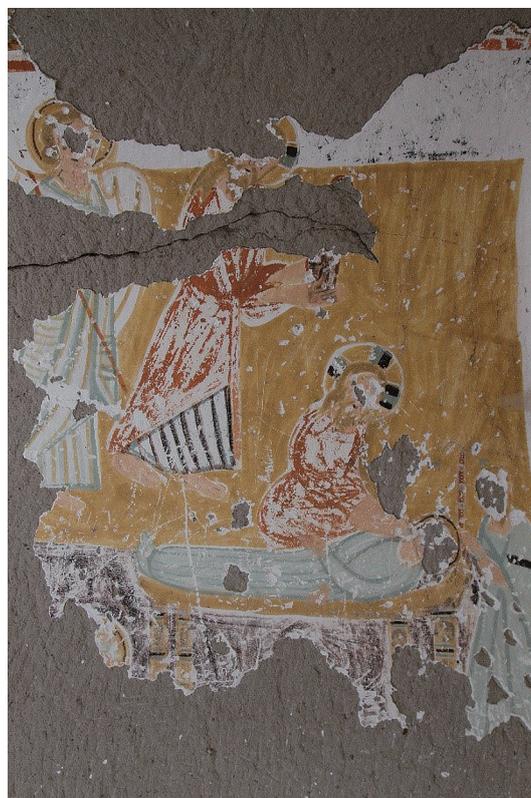


fig. 1 アーチャルトウ・キリセシ

(2) 「聖母の眠り」図像に関して拙稿にて概要をまとめている。煩雑を避けるため本稿では掲載しなかった他地域・時代の「眠り」図像の一部も所収する。「ビザンティン美術における「聖母の眠り」図像の典拠とイコノグラフィーを巡る諸問題について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』早稲田大学大学院文学研究科、第63輯、pp. 459-479、2018年；「ビザンティン聖堂装飾における「聖母の眠り」図像研究—カッパドキアの作例を中心に—」『鹿島美術研究』鹿島美術財団、年報第32号別冊、pp. 225-236、2015年。

(3) 高晟俊「カッパドキア岩窟修道院聖堂壁画の研究 アーチ・アルト・キリセシ(ウフララ渓谷)」修士論文、東京藝術大学、1999年、pp. 51-53；益田朋幸『ビザンティン聖堂装飾プログラム論』中央公論美術出版、2014年、p. 6。

(4) 高氏は研究者間で7世紀~11世紀まで各論があるとした上で、上限9世紀後半、下限11世紀とした。高晟俊「カッパドキア岩窟修道院聖堂 アーチ・アルト・キリセシの装飾プログラム」『美術史』154号(2003)、pp. 243-255。また益田(2014)は7世紀とする。筆者はカッパドキア図像の編年を行う能力を持たないが、こと「聖母の眠り」を見る限り10世紀以降のものと考え難い。よってイコノクラスム前後の作としたい。

眠りに際して降臨するキリストである。アーチャルトゥで描かれるのは、魂を受け取った姿と天使に引き渡す姿か、或いは魂を抱え天へと昇る姿である。後者であるとすれば、主要な典拠には認められない描写である。成立年代はイコノクラスム前後であり、現存しないイコノクラスム以前の「眠り」図像の一形式を示しているとも考えられる。しかしその構図は他作例から隔絶しているため比較考察が難しく、本節では図像学的記述を行うに留めたい。向かって右に直交する壁面があるが剝落が激しく壁画主題は不明である。向かい合う壁面には「エジプト逃避」が描かれる。

ユランル・キリセ Yılanlı Kilise in İhlara⁽⁵⁾ (fig. 2)

ウフララ地区、ユランル・キリセは様式的に9世紀後半から10世紀前半の作例とされ、これも「聖母の眠り」の現存する聖堂装飾としては古い時期に属す。図像表面の状態は落書と炭酸塩の析出により良くないが、構図は確認可能である。その特徴として、他作例で採られるマリアとキリストを他の人物が囲むものではなく、画面いっぱい引き伸ばされたマリアのベッドの背後に人物が横一列に並ぶ構図を採る点が挙げられる。この特殊な作例は、成立年代から考えてアーチ・アルトゥと同様、後述する「定型」が成立する以前の様相を示すものとも見ることも可能であろう。ただし、極端に引き伸ばされたマリアの身体とベッドは、画家が与えられた壁面を最大限に活用しようとした結果である可能性を考慮せねばならない。画面右には天使が、その左には直立不動の使徒が並ぶ。「定型」において使徒はマリアを囲み、その表現はある程度動感を持つことからマリアの死を悼む様子が伝わってくるが、ユランル・キリセの硬直した構図はマリアの死に使徒が立ち会ったという事実を説明的に示すだけに見え、説話性が希薄である⁽⁶⁾。「眠り」図は同聖堂内でも比較的大きな壁面を与えられており、重要な図像として認識されていたように思われる。また本図で興味深いのが、ベッドの手前に「ユダヤ人イェフォニアス」が描かれる点である。これも顔面が失われているため判別が難しいが、画面のほぼ中央に他の人物よりやや小さく描かれ、その仕草はオランスのようでもある。しかし袖口から手は見えず、少し上のベッド縁に手は張り付いている。Epsteinによれば「眠り」図に描かれるユダヤ人モチーフとして最古のものである⁽⁷⁾。マリアの葬列を襲撃したユダヤ人イェフォニアスは、ベッドに掛けた手が萎え、あるいは斬り落とされたと伝承は語る⁽⁸⁾。イェフォニアスモチーフはこのユランル・キリセの作例からおよそ2世紀作例が絶えるなど、中期の「聖母の眠り」には珍しい。一方、ポスト・ビザンティン期に入ると頻出するようになるという変化が現れる。「眠り」図周囲はいずれも聖人及び天使の立像である。向かい合う壁面には「最後の晩餐」が描かれるが、これは意味的関連ではなくベッドを囲む使徒と食卓を囲む使徒という、形態的類似を意識しての配置と思われる。



fig. 2 ユランル・キリセ

- (5) C. Jolivet-Lévy, *Les églises byzantines en Cappadoce: le programme iconographique de l'abside et de ses abords*, Paris 1991, pp. 307-10.
- (6) ただし比較的残存している天使の顔を見ると明らかに哀しみの表情を浮かべていることがわかる。カッパドキアの作例は全般に剝落と落書による傷みが激しいが、特にそれは顔面部に顕著である。本作でも使徒らの眼が執拗に削り取られているため、もしこれが残存していた場合、受ける印象が変わる可能性はあろう。
- (7) A. W. Epstein, "Frescoes of the Mavriotissa Monastery near Kastoria: Evidence of Millenarianism and Anti-Semitism in the Wake of the First Crusade," *Gesta* 21-1 (1982), p. 26.
- (8) S. J. Shoemaker, "'Let Us Go and Burn her Body': The Image of the Jews in the Early Dormition Traditions," *Church History* 68: 4 (1999), pp. 775-823.

アイヴァル・キリセ Ayvalı Kilise in Gülü Dere⁽⁹⁾ (fig. 3)

ユラナル・キリセと同時期、或いはそれに次いで古い作例がギュル・デレに在るアイヴァル・キリセの「眠り」である。本作は銘文により、913年から20年の間という制作年が確定しているビザンティン美術でも珍しい基準作例である。2連バシリカの北聖堂、その北壁に描かれる。ベッドの左右に使徒を分割して配する構図は、アーチ・アルトゥヤユラナルと比較すると後の定型に近づいたものと言える。一方マリアのベッドは画面右が高く斜めに描かれるといった定型との差異も確認できる。遠近法的理解に基づいているとは言えないが、画面に奥行きを出そうとする意図があったのではないか。マリアの身体の周囲には小さな十字模様、もしくは花模様が描かれている。十字であればベッドに敷かれた布の文様、花であれば亡骸を包むように花を供えた様子を描いたものか。いずれにせよ、この印象的なモチーフは他作には見られない。カッパドキアの図像には、しばしば非常に説明的な銘が記され、本作もその例外ではない。隣接する壁面、および向かい合う壁面のいずれも聖人立像であり、「眠り」図との関連はうかがえない。北聖堂は天井の「最後の審判」を除く壁面の多くが聖人像で占められており、数少ない説話図像として「眠り」図が選ばれた理由は考察する余地があるが、詳細は別稿に譲りたい。



fig. 3 アイヴァル・キリセ

トカル・キリセ新聖堂 Tokalı Kilise in Göreme, New Church⁽¹⁰⁾ (fig. 4)

ギョレメ地区には多くの聖堂が残るが、中でも密集して岩窟聖堂の見られる一区画が野外博物館として公開されている。その聖堂群のひとつであるトカル・キリセ新聖堂は、岩壁に穿たれた単廊式の10世紀前半の聖堂(旧聖堂)のアプシスを掘り抜き、奥に拡張したものである。成立時期は10世紀後半とされる。カッパドキアの聖堂壁画はローカルな画家が描いたものがその殆どを占めるが、本聖堂は首都コンスタンティノポリスから画家を招聘し壁画を描かせた特殊な聖堂である。「眠り」は聖堂内陣、アプシス手前の左側壁面に描かれている。図像下部は完全に剥落しており、マリアの姿は現存しないが、上部の保存状態は良好である。聖堂西壁の扉口上部という定位置に配されないのは他のカッパドキア作例と同様であるが、内陣という配置は「眠り」に聖堂装飾中でも重要な位置を与えたと考えられる。一方で内陣手前のアーチ状壁面に遮られ見通しは良くなく、他聖堂でしばしば見られるモニュメンタルな存在感を得ることは出来ていない。首都での制作と考えられる10世紀の象牙浮彫には、のちの時代まで継承され



fig. 4 トカル・キリセ新聖堂

(9) Jolivet-Lévy (1991), pp. 37-44.

(10) *Ibid.*, pp. 94-108; A. W. Epstein, *Tokalı Kikise: Tenth-Century Metropolitan Art in Byzantine Cappadocia*, Washington, D.C. 1986, pl. 100.

る図像の定型が現れているが、本聖堂の「眠り」もこの定型に則った構図を採用する。すなわち中央にベッドに横たわるマリアとキリストを配し、その周囲を使徒や天使が囲む左右対称な構図である。画面上部には雲に乗った使徒が描かれる。マリアの許に集まる使徒を描いたこのモチーフの例としては古いものである。管見の限りカッパドキアには本モチーフを描く「眠り」は他にない。比較的古い現存例としてはマケドニア、オフリドの聖ソフィア聖堂（11世紀半ば）が挙げられよう⁽¹¹⁾。ただし本モチーフを描くためには画面上方に余裕のある壁面が必要で、多くが小規模なカッパドキア岩窟聖堂でその壁面を得るのは容易でなかったことは考慮しなければならない。

サクル・キリセ Saklı Kilise in Göreme⁽¹²⁾ (fig. 5)

ギョレメ野外博物館から少し離れて位置するサクル・キリセは、恐らく1071年のマラズギルトの戦い以前に描かれたものである。西壁、出入口の左脇に描かれることから、後の扉口上部という定位置とほぼ同じ意味を持つ位置とあってよいだろう。図像は剥落が激しく、褪色が著しいことから線描画のような現状である。中央にマリアとキリスト、左右に使徒を配する点は定型通りである。現状を見る限り特異なモチーフも描かれておらず、11世紀後半には定型がカッパドキアにおいても普及していたと見なせるだろう。隣接する南壁には「降誕」、向かい合う東側の柱間アーチには「マンディリオン（聖顔布）」と「受胎告知」が描かれる。隣接する天井に施されるのは装飾文様と十字架レリーフである。

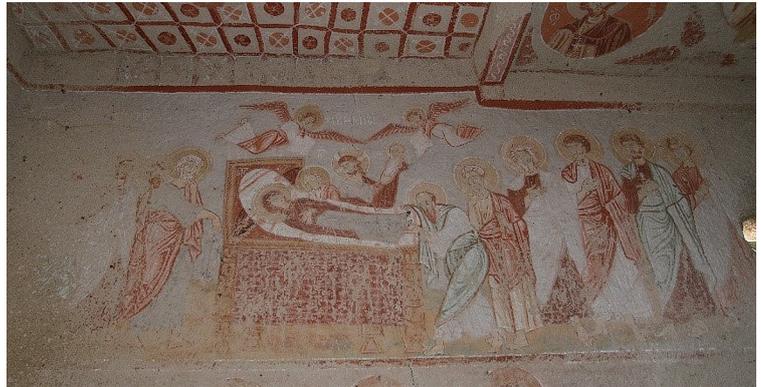


fig. 5 サクル・キリセ

メリェマナ・キリセ（ギョレメ） Meryemana Kilise in Göreme⁽¹³⁾ (fig. 6)

ギョレメ地区メリェマナ・キリセ（11世紀）は内部構造がやや複雑であるため「聖母の眠り」周辺のみ記述する。アプシス手前にヴォールト天井が設けられ、格子状に区分けされ四つの主題が描かれる。そのうち北西方向が「眠り」となる。剥落が激しいが、これも定型に則ったものである。向かって右側に「磔刑」、ヴォールトの頂点から向かい合う位置に「降誕」、降誕の左側に「ベツレヘムへの旅」が描かれる。

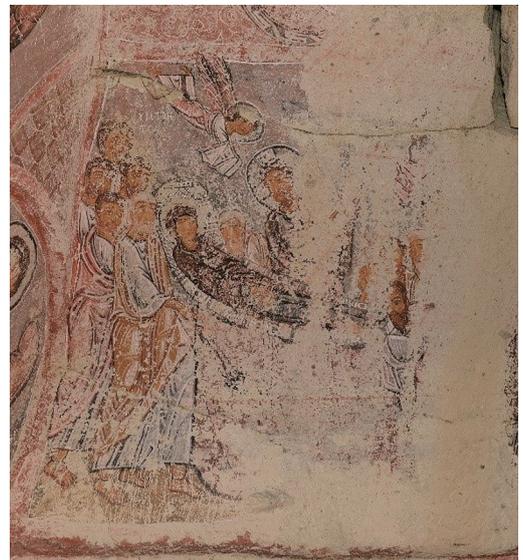


fig. 6 メリェマナ・キリセ（ギョレメ）

メリェマナ・キリセ（セリメ） Meryemana Kilise in Selime⁽¹⁴⁾ (fig. 7)

ウフララ溪谷の端にあたるセリメ地区メリェマナ・キリセは岩窟聖堂としては高い天井を持つ比較的大型の聖堂である。残存する壁画は少なく、説話主題は「眠り」のみが描かれる。

(11) A. Nikolovski, D. Cornakov, K. Balabanov, *The Cultural Monuments of the Socialist Republic of Macedonia*, Skopje 1971, pp. 173-77.

(12) Jolivet-Lévy (1991), pp. 85-87.

(13) *Ibid.*, pp. 143-46.

(14) L. Giovannini, *Arts du Cappadoce*, Geneva 1971, p. 205.

成立年代の判断は難しいが、ここでは11世紀の作としておく。壁画のない壁面は、表面を観察すると殆どの部分が建立当初から何も描かれていなかったようである。カッパドキアの聖堂では何らかの理由で壁面に壁画を描かず空白を残すものが散見されるが、本聖堂のようにわずかな聖人立像とただ一つの説話主題のみ描くという例はない。「眠り」のキリストはやや中央から左にずれるものの、使徒の配置などおおむね定型に従った構図である。顔貌は悉く削り取られているが、落書が少ないため近年は人の出入りが殆どなかったようである。本堂の北壁に大きな面積を占め他の説話主題もないことから重要視されていた図像であることは確実であるが、類例もなく詳細は不明である。



fig. 7 メリエマナ・キリセ (セリメ)

ソーアナル 28 番聖堂 Soğanlı No. 28⁽¹⁵⁾ (fig. 8)

ソーアナル地区の小さな「キノコ岩」に穿たれたごく小さな聖堂であり、2015年に Jolivet-Lévy により新たに報告された11世紀の聖堂である⁽¹⁶⁾。単廊式、ヴォールト天井を持つ。壁画の状態は著しく劣悪であり、殆どの主題が断片的にのみ遺る。天井の主題で判別できるものとして「磔刑」がある。南壁は全面を使い献堂図が描かれる。左三分の二が状態は悪いながらも現存しており、向かって左に聖母ないし聖母子座像とターバンを巻いた献堂者、中央に大天使ミカエル立像ともう一人の献堂者が同じくターバンを巻いて立つ。いずれも顔貌は判断できない状態であり、この損傷は人為的なものと思われる。西壁には扉口が開き、その上部のチュンパム状壁面に壁画の残欠が見られる。扉口の左右はほぼ何も遺らない。扉口上部の図像は、中央下部に十字を囲む円形モチーフを繰り返す箱状の物体、その左右にそれぞれ中央を向く人物の下半身が一体ずつ認められる。これらの特徴は、中央の物体はマリアのベッドであり、この主題が「聖母の眠り」であることを示唆している。つまり本聖堂の「眠り」配置は定型に従う。しかし図像学的な考察は困難な保存状態である。



fig. 8 ソーアナル 28 番聖堂

エレン・キリセ Ören Kilise in Nar⁽¹⁷⁾ (fig. 9)

岩窟聖堂ながら、中央ドームとそれを支える柱を掘り抜いたギリシア十字式プランを持つ。ただしドーム下の四本の柱は全て失われている。11世紀の成立とされる。壁画は一部に残存する。壁面の隅にわずかに残る漆喰や顔料から、かつては少なくとも壁面の多くが壁画に覆われていたと思われるが、現状ではその再現は不可能である。いくつかの柱に聖人立像、アプシス・コンクの左隅にも聖人立像が描かれるが、説話主題は「聖母の眠り」のみが現存する。ドーム下北壁のほぼ中央がその配置である。聖堂内では、アプシス、西壁中央ベイに次いでドーム下南北壁が大きな面積を占めており、比較的重要な位置を与えられていたとみてよい。

(15) C. Jolivet-Lévy, *La Cappadoce: Un siècle après G. de Jerphanion*, vol. 1, Paris 2015, pp. 282-284.

(16) *Ibid.*.

(17) Jolivet-Lévy (1991), pp. 231-232.

現存部分は柱間の右三分の一ほどであるが、恐らく柱間全幅を使って「眠り」が描かれていたものと思われる。布でくるまれたマリアの魂を抱えるキリストの上半身、向かって右から魂を受け取る天使が描かれる。全幅に描かれていたと仮定するとキリストは中央よりやや右にずれて描かれていることになる。周囲の壁面は全て失われているが、聖堂壁画の定型として「眠り」の下部にはイコニックな聖人立像が描かれていたとみてよいだろう。上部にはチューンパナム状壁面があり、ここにも説話場面があったと想像される。この部分、或いは向かい合う北壁面の図像とは何らかのプログラムの関係を持っていた可能性があるだろう。



fig. 9 エレン・キリセ

スウンビュリュ・キリセ Sümbüllü Kilise in Ihlara⁽¹⁸⁾ (fig. 10)

ウフララ渓谷に点在する聖堂の一つであるスウンビュリュ・キリセの「聖母の眠り」は、南側、非常に狭いニッチ状の壁面に描かれる。壁面上部が四分の一球形であるため、壁画の上方に余裕がなく、天使は一人だけ描かれる。その他はおおむね定型に従った描写である。隣接する左の壁面は失われ、右は90度直交する壁面に「受胎告知」が描かれる。隣接する天井にはソロモンの胸像が描かれるが、周囲に点在する他の聖人像と同様「眠り」との積極的関係性は見出せない。なお本聖堂の成立年代は10世紀から12世紀とやや説に幅がある。

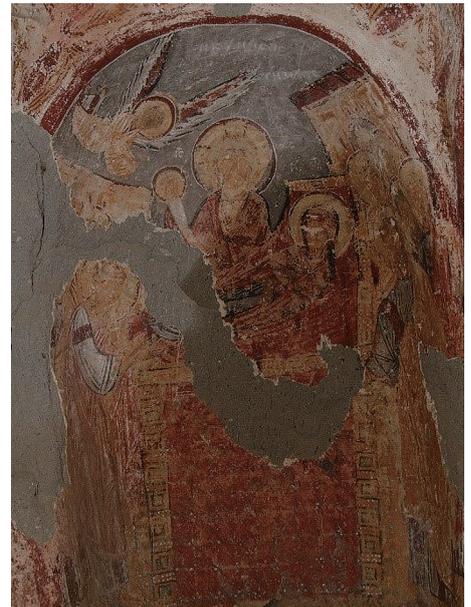


fig. 10 スウンビュリュ・キリセ

ケペズ・キリセ Kepez Kilise⁽¹⁹⁾ (fig. 11)

ユルギュブ近郊のケペズ谷に位置する、比較的大きな「キノコ岩」に穿たれた岩窟聖堂で、ドームを持つ三葉形平面である。ドームを含めた西側が大きく崩落している。「聖母の眠り」は北側コンクという重要な配置を与えられている。画面下部は剥落しているが、キリストの頭部とマリアの魂の一部、魂を受け取る天使が一体系存する。また銘文 (H KYMHIC THC Θ[EOTO]KOY) から「聖母の眠り」であることが明らかである。構図は壁面の形状と共にスウンビュリュ・キリセと類似する。「眠り」のコンク手前のヴォールト天井は東西にそれぞれ一主題ずつの図像が描かれる。西側は崩落のため主題不明、東側は「聖母神殿奉獻」が描かれる。なお「眠り」と向かい合わせとなる南側コンクには「降誕」が配される。成立年代は11世紀



fig. 11 ケペズ・キリセ

(18) Jolivet-Lévy (1991), pp. 305-07.

(19) *Ibid.*, pp. 223-224. ケペズ・キリセの周囲には他に二つのモニュメントがあり、往時はこれらで修道院を形成していたとされる。文献により名称のずれがあり、Jolivet-Lévyは本聖堂をサルジャ・キリセ Sarca Kilise としているが、現地ではこの名を本聖堂より北西にあるモニュメントに当てている。本稿では現地での呼称に従い本聖堂をケペズ・キリセとする。

半ばとされる。

ギョレメ 2 番 d 聖堂 Göreme No.2d⁽²⁰⁾ (fig. 12)

ギョレメ地区の聖堂は、20世紀初頭にカッパドキアを調査した G. de Jerpanion 神父の調査によって番号が振られた。のちに見出された聖堂には枝番も加わる。そのうち 2 番 d 聖堂は、近年まで入り口が塞がれており、そのため内部の壁画は剥落こそ激しいが、人為的な落書きは少ない。「聖母の眠り」はナルテクス状の空間のヴォールト天井という、珍しい配置に描かれる。その殆どは剥落しているが、銘文 (H KHMHCIC) から「聖母の眠り」であることが分かる。他に判別できるモチーフは、マリアの頭部の一部、マリアの魂の一部 (口元から顎にかけて) とキリストの手、上空の天使などである。本作の特徴として、背景に星が描かれることも挙げられる。これは夜間であることを描写しようとしたというよりも、神秘的な「神の顕現」^{テオファニア}を示そうとしたものと考えられる。ヴォールト天井は3分の2ほどが「眠り」図で埋められ、残りの空間には聖人のメダイオンが3つ並ぶ。一部崩落した天井部分にもおそらくメダイオンがあったと思われ、計4つのメダイオンが「眠り」と同じ壁面に描かれる。ポスト・ビザンティン期になると、画面の左右端に銘文が記された巻物を持ったダマスコスとヨアンニスと賛歌作者コスマスが立つ構図を持つ作例が散見されるが⁽²¹⁾、メダイオンとの組み合わせは類例が無い。比較的状態の良いメダイオンでは若い輔祭姿の男性が描かれているが、ヨアンニスとコスマスの二聖人は隠修士あるいは頭にターバンを巻いた姿をとるため別人物である。メダイオン間の背景にも星が見えることから、背景は「眠り」と共有していることになるが、聖人に銘が残らないため「眠り」と関連がある人物であるかどうか不明である。カッパドキアの聖堂では空間を充填するために聖人メダイオンが用いられる場合があるため、聖人と「眠り」に積極的な関連性はないと考えることもできようが、結論には同様の類例が求められる。なお成立年代は聖堂内の他図像から11世紀後半の作と判断する。



fig. 12 ギョレメ 2 番 d 聖堂

カルシュ・キリセ Karşı Kilise near Gülşehir⁽²²⁾ (fig. 13)

ギュルシェヒル近郊、カルシュ・キリセは1212年の年記が残る。南壁に描かれる「眠り」図は、上下に窮屈な画面のため、左右に人物が一行に並ぶ構図を採る。しかしユランル・キリセとは異なり、中央にマリアとキリスト、左右に使徒が並ぶのは定型に従う。周囲には、上部に「最後の晩餐」と「キリストの逮捕」、向かって右には「炉の中の3人のへ



fig. 13 カルシュ・キリセ

⁽²⁰⁾ 菅原裕文、武田一文「カッパドキア、ギョレメにおける未報告聖堂の図像プログラム」『エクフラシス』第5号、2015年、pp. 22-38; Jolivet-Lévy (2015), pp. 54-55.

⁽²¹⁾ 銘文には二人の作とされる聖母賛歌が記される。上田恒夫他訳『ディオニシオスのエルミニア：東方正教会の絵画指南書』金沢美術工芸大学、1999年、p. 266.

⁽²²⁾ Jolivet-Lévy (1991), pp. 229-30.

ブライ人」、向かって左はアプシス手前の「受胎告知」が配置される。向かい合う壁面には「天国で憩うマリア、アブラハム、善き盗人」が描かれる。いずれも「眠り」図との関連は現時点で指摘出来ないが、本聖堂の主題選択は興味深い点があり、プログラム論的問題が指摘可能か検討中である。

クルク・ダム・アルトゥ・キリセシ Kirk dam alti Kilisesi in Ihlara⁽²³⁾ (fig. 14)

ウフララ溪谷クルク・ダム・アルトゥ・キリセシは13世紀末の作例である。岩窟聖堂の西側が崩落したため大きく内部が露出しており、また壁面の整形はそれほど精密になされず不定形である。落書きによる汚損が著しいが、壁面には臙脂色の枠で区切られた区画が多く設けられイコン的人物像と説話主題が散りばめられる。「眠り」は西側区画の北西壁面に描かれている。ほぼ正方形の画面が与えられ、登場人物はいずれも顔面を破壊されているが定型に則った描き方をされていることが見てとれる。マリアのベッド手前には手を斬り落とされるユダヤ人イエフォニアスが描かれる。イエフォニアスの図像はユラニルで見たが、13世紀末ではまだ珍しいモチーフといえる。同時代の例としては北マケドニア・オフリドのパナギア・ペリブレプトス聖堂(1294/95)⁽²⁴⁾が挙げられよう。周囲の図像を確認すると、上端が天井と接しており天井には大きく「昇天」が描かれる。向かって右にはゲオルギオスに聖堂を捧げる献堂図、向かって左は90度直交する壁面に「降誕」を配する。



fig. 14 クルク・ダム・アルトゥ・キリセシ

聖ゲオルギオス聖堂 (オルタキョイ)⁽²⁵⁾ St. George in Ortaköy (fig. 15)

13世紀の成立とされる、カッパドキアでは比較的珍しい切り石組みの聖堂である。中央にドームを持つトリコンク型プランであるが、ドームは崩落している。本堂南壁に扉口が開きナルテクスと接続する。ナルテクスに壁画は遺らないが、本堂部分の状態は良くないながら壁画を見ることができる。本堂はヴォールト天井を持つが、天井を含めた本堂のほぼ全面が「最後の審判」の描写に費やされる。その中で異なる主題として描かれるのが、扉口左上部に接する形で配置される「聖母の眠り」である。ベッドに横たわるマリアと、マリア頭部側の使徒数人のみが残る。画面中央、マリアのベッドの奥には胸元にかがんだ人物が見え、これは定型に従えばヨハネである。彼の周囲にキリストの描写は確認できないので、画面右に大きくずらされて配置されたものと考えられる。



fig. 15 聖ゲオルギオス聖堂

⁽²³⁾ *Ibid.*, pp. 318-20.

⁽²⁴⁾ H. Hallensleben, *Die Malerschule des Königs Milutin*, Gießen 1963, p. 23.

⁽²⁵⁾ Jolivet-Lévy (1991), pp. 251-253.

聖堂内配置に見るカッパドキアにおける「聖母の眠り」

筆者が現時点で画像と共に提示できる十五の聖堂の「眠り」について簡潔な記述と共に確認した。現地調査のたびに新たな資料を確認できているため、今後もカッパドキアの「眠り」図像の考察は発展の余地があるが、本稿ではその現状報告として問題点を考えたい。カッパドキアの「眠り」図は、確認できる全ての作例において他地域では10～11世紀に現れる古い構図を持つことを別稿で指摘した²⁶⁾。これは当地に古い構図が保存されていたとみることができ、それは1071年のマラズギルトの戦いでビザンティン本国と切り離された歴史的背景によるものと考えられる。本稿では「眠り」図の特質を考える上で聖堂内の配置に着目したい。前述の通り、ビザンティン聖堂の定型的な図像配置では「眠り」図は聖堂本堂の西側扉口上部に描かれる。この位置は信徒が常に通る、すなわち眺めることとなる重要な配置であると共に、これも定型では東のアプシス・コンクに描かれる「聖母子」と対応する関係となる。この関係はMaguireが指摘した²⁷⁾通りであるが、聖堂装飾プログラムを考える上で重要な十二大祭思想が成立するのが11～12世紀であり、「眠り」図が聖堂に頻りに描かれるのもこれと呼応する時期であると考え、カッパドキアの多くの聖堂はこの影響を受けていない。従ってカッパドキアの図像配置はこのような思想とは異なる背景を想定しなければならない。

結論から述べれば、カッパドキアの「眠り」図配置は多岐にわたり、地域の統一的な傾向をみることは難しい。しかし、それは西壁を定位置とする前の模索段階とみることが可能であろう。まず最も時代の古いアーチャルトゥ、アイヴァル、ユランルの三聖堂は図像の構図も様々であり、聖堂内配置も現状指摘できるところはない。ビザンティンの他地域に同時代の作例がほぼ遺らないため、地域差を問うことも難しい。一方イコノクラスム以前に「眠り」の図像化がなされていたことを示すものとして重要な作例である。

西壁、あるいは扉口上部という配置をもつのが三聖堂、サクル・キリセ、ソーアナル28番聖堂、オルタキョイの聖ゲオルギオス聖堂である。サクル・キリセは11世紀かつマラズギルト前の成立とみることから、装飾プログラムの定型に従ったと考えることができよう。ソーアナル28番は配置としては定型であるが、狭隘な聖堂で描くことができる主題は取捨選択が必要だったと思われる。あえて描いたことには積極的な理由もあり得ようが、現状では考察に十分な壁画の残存状態ではない。同様の形状でより保存状態の良い聖堂が確認できれば改めて考えたい。聖ゲオルギオス聖堂は、西壁を含めた本堂西側を「最後の審判」で埋めるのは中期ビザンティンのプログラムを想起させる²⁸⁾。一方西壁ではないものの本堂出入口に隣接するという「眠り」の配置はこれも定型的配置を思わせるが、全体として「審判」図に面積を取られ「眠り」図はかなり窮屈な印象であり、「眠り」と「審判」双方を描くという要請を強引に解決したようにも見える。

聖堂内で、「眠り」に重要な配置を与えたとみることができるのは以下の四聖堂、トカル・キリセ新聖堂、ギョレメ2番d聖堂、ケペズ・キリセ、エレン・キリセ、セリメのメリェマナ・キリセである。しかしその方法は一定ではない。トカル・キリセではアプシス手前の壁面に配された。聖所という最も重要な区画の周辺に描いたことは、図像そのものの位置付けにも関わることだろう。しかし周辺の他主題との連関が構築されているようには見受けられない。エレンは北壁の比較的高く広い壁面を与えられたが、周辺図像が失われておりプログラムを考察しえない。2番d、メリェマナは図像を独立した形で描くことで重要性を強調している。2番dのようにナルテクス天井を占める配置は類例を見ない。同様に、少なくとも現存する唯一の説話主題として「眠り」を選んだメリェマナは、寄進者がこの図像、祝祭に高い関心を持っていたことを示す。だがこれら四聖堂は図像が孤立しているため、「重要視した」であろうこと以上の指摘は難しい。一方、ケペズ・キリセではト

26) 武田一文「ビザンティン聖堂装飾における「聖母の眠り」図像研究—カッパドキアの作例を中心に—」『鹿島美術研究』年報第32号別冊、2015年、pp. 225-236。

27) H. Maguire, *Art and Eloquence in Byzantium*, Princeton 1981, pp. 59-61.

28) 「最後の審判」図および同図と「眠り」図の関係は拙稿で指摘した。武田一文「「聖母の眠り」図から見る聖堂装飾プログラム—パナギア・マヴリオティッサ修道院（ギリシア）を一例として—」益田朋幸編『聖堂の小宇宙』2016年、pp. 203-224。左記論文で指摘した装飾プログラム論が、聖ゲオルギオスや同じく「審判」と「眠り」が近接するアイヴァルに適用できるかは今後検討したい。

リコンクの一つを占めるという位置付けと共に、他図像との連関を志向したことが見て取れるのである。

結論に代えて：カッパドキアにおける「聖母の眠り」と「降誕」のプログラム

ケペズ・キリセでは中央アプシスに「デイシス」を配し、北に「眠り」、南に「降誕」を描く。中央アプシスに「デイシス」を描くのは「眠り」の有無を問わずカッパドキアでは多く見られるため²⁹⁾、本論には関わらない。「聖母の眠り」と「降誕」が向かい合わせとなるのが本聖堂の装飾プログラムの特徴である。Jolivet-Lévy は、Maguire の論を引きながら「ビザンティン聖堂で好まれた「対照」がここにも表れている」とし³⁰⁾、筆者もその点には同意するものである。「降誕」と「眠り」はいずれもマリア・キリストの親子が登場し、それぞれに赤子（幼子イエスと赤子の姿をとるマリアの魂）が描かれるという共通点を持つ。またキリストの誕生とマリアの死という対照が生まれている。しかしここでは主に形態的・構図的な対照が指摘されるのみである。以下の通り同様の組み合わせを持つ聖堂がカッパドキアには複数見られ、また他地域でも比較的古い聖堂に見ることができる³¹⁾。従って「眠り」・「降誕」の組み合わせには中期ビザンティン期の聖母に関わる思想的裏付けが見出せるのではないかと筆者は仮定する。本稿ではその証明までは踏み込めないが、その前段階として同組み合わせを持つ聖堂を確認しておきたい。サクル・キリセでは隣接して「降誕」、向かい側に「受胎告知」が描かれる。ギョレメのメリエマナ・キリセではヴォールト天井を四分割し、「眠り」の向かい側に「降誕」、「眠り」の隣には「磔刑」、「降誕」の隣には「ベツレヘムへの旅」が描かれる (fig. 16)。クルク・ダム・アルトゥでも隣接して「降誕」が配された。単純に数量のみ見れば、「眠り」を持つ十五聖堂のうち四聖堂が「降誕」図と隣接して配置されており、二図像の関係性はある程度普及していたように思われる。しかし、それぞれにどれほど神学的な思想背景があったかは差異があろう。サクル・キリセの場合、「受胎告知」が近接していることは、聖母に関わる重要な主題が一区画に集められたのだと説明することも可能である。スュンビュリュ・キリセでは、「眠り」と「受胎告知」が隣接して描かれていた。「降誕」や「受胎告知」は聖母の生涯初めを象徴する事件として、「眠り」は終わりを象徴する事件として組み合わせられたとも言える。メリエマナ・キリセでは「眠り」の描かれるヴォールト天井の主題中、「ベツレヘムへの旅」は他の三主題と比較し重要性が下がる³²⁾。ヴォールトの南側だけ眺めると「ベツレヘムへの旅」「降誕」と、説話を時系列に沿って描いている。北側は「眠り」と「磔刑」である。「磔刑」は聖書で予告されたマリアの「哀しみ」が成就される事件であり、「眠り」と関連があると言えるだろうか。管見の限り、教父説教において「眠り」はマリアの哀しみと強く結び付けられては語られず、むしろ死に別れた息子との出会いに対する喜

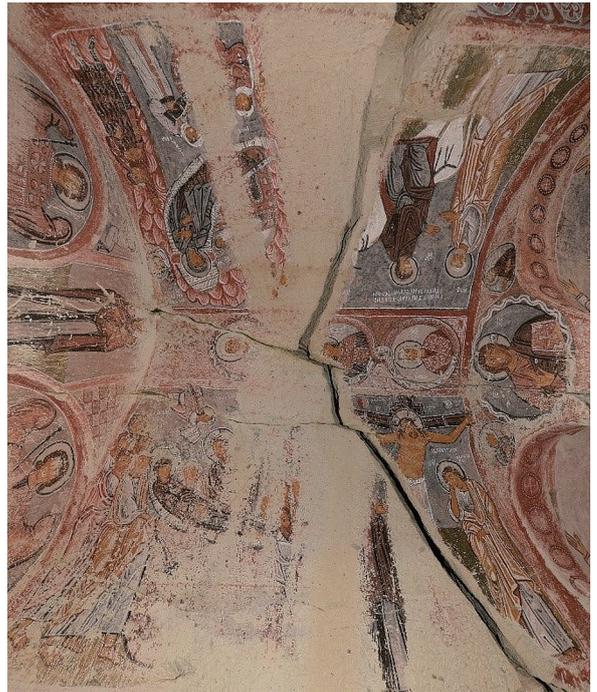


fig. 16 メリエマナ・キリセ（ギョレメ）
画面左下が「聖母の眠り」

29) 本論で度々引く Jolivet-Lévy (1991) はカッパドキアのアプシス図像を包括的に取り上げたものである。一般にビザンティン聖堂ではアプシスに聖母ないし聖母子を配するが、カッパドキアでは「デイシス」と「マイエスタス・ドミニ（荘嚴のキリスト）」が頻出する。

30) Jolivet-Lévy (1991), p. 223.

31) 一例としてシチリア、パレルモのサンタ・マリア・デッラミラーリオ聖堂（12世紀半ば）が挙げられる。ヴォールト天井を二分割して「降誕」と「眠り」が描かれている。E. Kitzinger, *The Mosaics of St. Mary's of the Admiral in Palermo*, Washington, D.C. 1990, pp. 184-189.

32) 他の三主題は全て十二大祭に数えられる。



fig. 17 ケペズ・キリセ ドーム下から撮影。左上に「聖母の眠り」、右上に「降誕」、中央下に「デイス」を描く3つのコンクをもつ。

び、母へ恩を返すことへの喜びが強調される。従って「眠り」と「降誕」を連関させるプログラムは理解されるが、残り二図像の位置付けは不明確である。

一方、ケペズ・キリセは北コンクに「眠り」を描き、その周囲に「聖母神殿奉献」を配する。この区画だけを考慮すると聖母に関する重要な祝祭をまとめたものとも見えるが、向かい合う南コンクに「降誕」を描くことで、南北コンクで二つの図像を対応させている (fig. 17)。これは他聖堂で見たような単に隣接させるプログラムより、象徴性を高めたものと言えるだろう。本聖堂の献堂者或いは画家は、「眠り」と「降誕」の組み合わせ、引いてはそこから読まれるプログラムを強調する意思があったことは明白である。先に述べたように、マリアの臨終に際し降臨したキリストは、マリアに自らを生き育てた礼を述べ、その恩返しのためやってきたのだと教父説教は語る³³⁾。聖堂に描かれる絵画主題を考えた場合、キリストの言う「恩」を象徴するのが「降誕」であるのは理解しやすいところである。しかし、ビザンティン聖堂の装飾プログラムは、後期ビザンティン期にかけ洗練されるに従い、西壁扉口上部に「聖母の眠り」を配し、対面する東のアプシスにはイコン的な「聖母子」像を配することで親子の関係を象徴的に語るようになる³⁴⁾。ここで問いとなるのは、カッパドキアで見られる「眠り」と「降誕」の組み合わせが単に古いプログラムというだけなのか、そこに思想的な反映はあるのか、「眠り」と「降誕」から「眠り」と「聖母子」への変化は発展的なものなのか、あるいは断絶があるのかといった点である。カッパドキアを含めた辺境域でのさらなる図像収集と聖母についての聖職者の言及などを調査し、「眠り」図と「降誕」図、さらにカッパドキアにおける聖母図像の位置付けについて検討を続ける予定である。

³³⁾ 8世紀のコンスタンティノポリス総主教ゲルマノス1世など。Ed.and trans. by B. E. Daley, *On the Dormition of Mary: early patristic homilies*, New York 1998, p. 171.

³⁴⁾ Maguire, *op. cit.*.

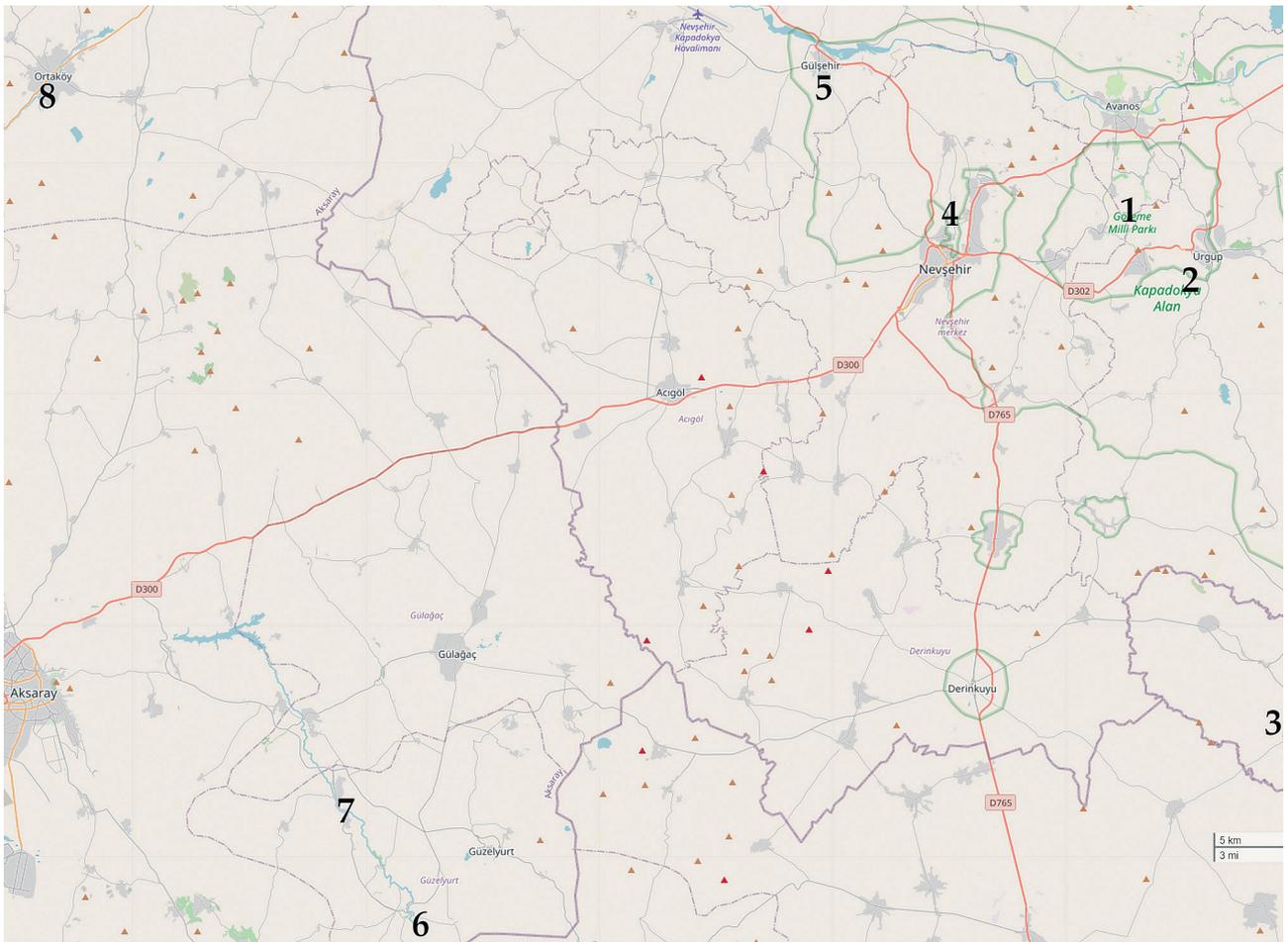


fig. 18 調査地概観（右下スケールは5km / 3mi）

1. ギョレメおよびギュリュ・デレ
2. ケベズ谷
3. ソーアナル
4. ナール
5. ギュルシェヒル
6. ウフララ
7. セリメ
8. オルタキョイ

図版出典

各聖堂はトルコ政府観光局及び現地博物館の許可の下、下記の年に撮影を行った。

fig. 1-3, 5, 7, 10, 12-14：筆者撮影、2014年

fig. 4：Epstein (1986), pl. 100.

fig. 6, 16：菅原裕文氏（金沢大学）撮影、2014年

fig. 8, 15：筆者撮影、2018年

fig. 9, 11, 17：筆者撮影、2019年

fig. 18：OpenStreetMapを基に筆者作成

本稿は科研費研究助成 18K12245 に基づく研究成果の一部である。